

〈研究ノート〉

映像表現におけるテーマ設定の考察

味谷和哉

要約

テーマ設定は、映像表現における「憲法」のようなもので、この作業なしでは質の高い作品は生まれないとさえ言える。しかし、テーマは重層的であり、表面的なテーマは別にしてその奥にある制作者としてのテーマは、視聴者に見えない部分だけに、そこの作業を曖昧にしたまま制作しているケースが多く、特に映像表現を目指す学生でそれを意識しながら制作に臨んでいる者は多くないと感じる。そこで、自らのテーマを気づかせる手段の一つとして、あるドキュメンタリー作品を見せた上で、作品内にある「2%の無私」について学生に回答させることで、その回答そのものが、テーマ設定に大いに役立つことが分かったので提示したい。そのために改めて、テーマ設定について考察し、その重要性や有用性を確認し、さらに学生の回答を分析することで、その有効性を立証しようというのが、この考察の眼目である。

キーワード

映像表現 テーマ設定 重層的 2%の無私 有効性

〔はじめに〕

哲学の祖、ソクラテスを持ち出すまでもなく、「自分自身を知る」ことは難しい。しかし、表現という分野で、いわゆる大衆など、何らかの対象に向けて発信する場合、自分自身が何をテーマとして発信しているのか、ある程度認識していないと、ソフト自体がコンセプトのぼやけたものになる可能性が高い。

例えば、世界的なアニメ作家、スタジオジブリの宮崎駿監督は、かつての「引退記者会見」^{注1)}で、こう語っている。

「子供たちに、『この世は生きるに値する』このことを伝えたくて作品を作ってきた」と。

この言葉は、作品を作りながら、見つけ出したものなのか、あるいは制作を始める当初からあったものなのかはわからない。

しかし、根底にこのテーマ、またはメッセージと呼び変えてもいいかもしれないものが、横たわっているからこそ、作画の美しさとともに、彼の作品が人の心を動かしていることは、紛れもないことだと

平成29年9月30日受付 平成29年12月12日受理
みたに かずや：淑徳大学 人文学部 兼任講師

感じる。いずれにせよ、自らのテーマが明確な表現者は、伝える力が強いと推定できる。

後に、この考察内で触れるが、作品のテーマというものは一作品に一つというものではなく、重層的なものであると考えられる。表面に見えているテーマから、根底に横たわるテーマまで、どこの「層」であっても、そのテーマを明確に認識している表現者は、力を持っていると、考えられる。そこで私は、表現者を志す学生に自身のテーマを見つけさせるために、様々な課題を与えて、試みを重ねてきた。社会で起きていることから、考えを書かせてみたり、あらゆるジャンル、主にドキュメンタリー作品を見せては、「どこで心が動いたのか」を分析させるなどの授業を展開してきた。

今回、その中から、特に学生が自身のテーマを見つけるのに、有効だったものについて考察してみたい。そこから、今の若者の心の一端が垣間見えてくると同時に、表現を教える指導者にも何らかの参考になれば、という思い。それが、この考察のモチベーションである。

次の4点がこの考察の前提になっていることを、理解していただいで、読んでいただければ、理解の一助になると思われる。

1. 私自身が、ドキュメンタリーの制作者であるということ。
2. 考察自体が、二大学の二つの授業で行われたものをベースにしていること。
3. 学生のサンプルは、その授業での回答を使用していること
4. 「テーマ設定」という言葉は、「コンセプト」とさほど変わりがなく、作品を作る場合の基本的な主題であるということ。

1. テーマ設定の重要性について

表現者にとって、テーマ設定することは、作品を制作するうえで、まずは取り掛からなければいけない最初の作業である。「テーマなければ作品なし」、と言われるほど作品の骨格をなす作業であることに間違いはない。

逆に、見る側にとってはテーマを声高に叫ばれても、気分が萎えるだけのことが多いので、基本的には制作者が企画、あるいは制作に取り掛かるときに粛々と行う孤独な作業であるとも言える。見る側にとっては、作品を見たうえで感じるものがあればそれで十分な訳で、あえてテーマを意識させないつくりの方が、良質の作品である確率が高いと思われる。根底にどういうテーマを忍ばせるかに、まずは制作者の力量が問われるといっても過言ではない。

具体的に最近の映像作品で、テーマ設定の仕方を見てみる。

2016年公開の映画「シン・ゴジラ」^{注2)}(東宝)(庵野秀明監督)。興行収入80億円を超えたゴジラシリーズの最新作品であるが、これまでのシリーズは放射能によって生み出された怪獣をどう退治するかに終始していた。しかし、今回の作品は、もし、本当にこういう未確認の生物が現れたら、具体的に日本という国はどう対処するのか、を詳細に描いてリアリズムを追求している。そのリアリティーが観客を引き付けた要因であろうし、庵野監督の力量と共に、テーマ設定が功を奏した結果であると考えられる。

リアリティーの追求をこの作品が目指していることは、見れば一目瞭然ではあるが、どういう「ゴジラ」にするかは、タイトルに忍ばせていると考えられる。監督自身は多くを語っていないが、「シン・ゴジラ」の「シン」がカタカナになっていることに、大きな意味を含んでいると考えられる。見る人の解釈に任せるといことなのだが、映画を全編見た後の制作者としての私の解釈では、作品のテーマとなるものが少なくとも5点、この「シン」に込められていると解釈できた。

まずは、新しいゴジラを目指したという意味で、「新」であることは間違いなさだろう。

次に、さらに強く進化したゴジラということで、「進」。

3つ目は、日本の現状とリンクさせて、事態は深刻であるという「深」。

4つ目は、作り手として真剣にリアリティーにこだわる、という「真」。

最後は、これも、根底に横たわるテーマだと思うが、人類が生み出したということで、英語で[SIN]。「罪」である。

この5つをテーマとして、作品を作ったであろうことは作り手であれば用意に想像できる。リアリティーとこの5つのテーマが結実したところに、2016年の「シン・ゴジラ」ブームが必然的に巻き起こったと言えるだろう。

この事例を見てもわかるように、作品を作る場合に、根幹となり、迷ったときには立ち返る場所にもなる「テーマ設定」である。スタッフがいた場合にも、それをつなぐ膠の役割にもなりうるし、まずは初歩的に学生が映像作品を作る場合にも、まずはテーマをしっかり設定させることから、始めないと立ち返る場所をなくし、制作が迷走してしまう可能性が危惧される。その意味でも、テーマ設定の重要性は、制作者にとっては、初歩中の初歩の作業である。しかし、現場的に言うと、いったい自らが何をテーマにしているのかが、わからずに作っているケースが少なくない。そこで、テーマを自覚させる段階が必要になると、私は考えている。

2. 当該作品のテーマ設定ワーク

今回、学生に教材として見せた作品は、私自身がプロデュースした「司馬遼太郎からの手紙」という作品である。2006年の2月12日が、国民作家と呼ばれた、司馬氏の没後10年であることから、企画したものである。フジテレビで当日午後2時から2時55分まで、放送された。

まずは、この作品を世に出すまでの、テーマ設定の過程を分析しておきたい。一つの具体的な事例を、制作者側から解説することが、この論考にとって参考になると考えるからである。

企画のモチベーションは当時の社会状況にある。企画を始めた前年の2005年はマンションの耐震偽装事件で揺れた年でもある。マンションの強度不足を知りながら、販売していた事件である。さらに遡れば、この年頭に「ホリエモン」こと堀江貴文氏が証券取引法違反容疑で逮捕されるなど、社会全体に「お金さえあれば……」の雰囲気は充満していた。特に堀江氏の言葉である「お金で買えないものはない」という発言は善悪を超えて賛否両論、社会に大きなインパクトを与えたことは事実である。テーマ設定は時に時代とリンクする場合が多い。

制作者というものは「ひねくれ者」というか、社会にそういう雰囲気が充満しているのなら、反対に「そうではないものは何か」を考えるものである。充満した雰囲気の中に、全く別視点のアイテムを放り込んで視聴者に考える材料を与えたい。そんな気持ちが高い。そのアイテムとして、日本の行く末を案じて亡くなった司馬氏はうってつけであると考えたからであり、私自身が学生時代に司馬氏の作品や言説をほとんど読んでいたこと、そして偶然にも没後10年が重なったことも、世に出すグッドタイミングであったのだろう。

具体的なリサーチに入って見つかったのは、司馬氏が1987年に小学生に向けて、教科書に初めて二つの作品を書き下ろしているという事実だった。しかも、大阪書籍というメジャーではない出版社の依頼に応じて、この大作家は執筆しているのである。そこには何かあると感じて制作を進めていった。

教科書に載った作品は、5年生用の「洪庵のたいまつ」と6年生用の「21世紀に生きる君たちへ」の二本。二つの作品とも「自分の持ち時間は少ない」と感じた司馬氏が次世代を担う子供たちへ、「先に逝く者」としてメッセージを送っている。「洪庵のたいまつ」は幕末に生きた蘭学者・緒方洪庵の生き方を通して「21世紀に生きる君たちへ」は、歴史を愛してきた人間として日本人の良さを中心にエ

ッセイとして、強い思いを伝えている。

「洪庵のたいまつ」は書き出しにすべてのメッセージが表出している。

「世のために尽くした人の一生ほど美しいものはない。」

また、「21世紀……」では、日本の歴史や自然を引き合いに出しながら、人は孤立して一人では生きられないことから、「思いやり」や、「いたわり」、「助け合い」などを大切にすべきであり、それにはちよつとした「訓練」が必要だと、子供たちへ遺言のごとく、諭すように書かれている。

ただ、この二作品を紹介するだけでは、ドキュメンタリー作品にはならない。単に「情報」の域を出ないからである。そこで、それにまつわる人物が必要となってくる。調べていくと、一人の人物に突き当たった。

まだ、どの学校も大阪書籍の教科書を採用していない段階から、この二つの文章に痛く感銘を受けたことから、課外授業で教えていた小学校の女性教諭が、東京都西多摩郡瑞穂町にいたというのである。この時はすでに、定年を迎え現役ではなかったが、当時課外授業を受けていた子供たちは、20歳代の後半を迎えているはずだった。

この事実が分かった上で、作品の最終的なコンセプトワークに入る。この女性教諭が課外授業までした「魂の授業」は、今20歳代後半を迎えた若者の心に何を残したのだろうか、そして、司馬氏の思いは届いているのだろうか？ という問いかけである。

コンセプトワークとして、根底にあるものは、当時の社会状況に対する、問いかけとともに、「教育とは何か」という大きな問題である。

司馬氏の作品を通して、それを学んだ子供たちのその後を追いかけることで、表面的にはこの授業に効果はあったのか、という現実的なテーマを敷きながら、その奥底にある教育の本質を考えようとしたのである。

非常に現実的な「その教育に効果はあったのか？」というわかりやすいテーマから入って、最後には「教育とは何なのか？」を個々に考えてもらえるように事実を提示する。さらに突っ込んでいえば、「この時代」にどう生きるべきなのかを考えてもらう材料を提示できれば、この作品を作る意義があると確信した。

この事例を見てもわかるように、一つの作品のテーマ設定というのは単純なものではなく、例外はあるものの重層的であることがよくわかる。この「テーマは重層的である」ということを前提にしないと、この作品を見たうえでの学生たちの回答が、テーマ設定にどうコンセプトと結びつくのかわからないので、あえて記すことにした。

3. 当該作品を理解するためのポイント

4 こうして、半年間の取材の後に完成した作品「司馬遼太郎からの手紙」を教材として理解するうえで、大切なポイントについて分析しておきたい。ここでは制作論を語るものではないので、あえて、制作の途中経過については触れない。ただ、その内容をいくつかのポイントで指摘しておかないと、次の分析する学生の回答についての認識があいまいになるので、概要を紹介しておきたい。

作品はまず、司馬氏が何故小学生向けの文章を書いたのか、関係者の証言で明らかにしていく。担当編集者や、義理の弟で司馬記念館の館長などの話で、彼らは「当時のバブル経済に狂奔する大人たちを見て、次世代の子供たちにメッセージを送ったのだ」と推測する。奇しくも、それは、このドキュメンタリー作品が放送されたその約20年後の世相と重なる。

取材は、小学校で女性教諭の課外授業を受けた児童のうち、連絡が取れた26人について行われた。

当時すでに26、27歳を迎えていた若者たち。「授業を覚えているのか」また、「授業は今の人生に生きているのか？」などをインタビュー、その代表的なものを今の生活ぶりも撮影させてもらって、紹介した。26人のインタビューの結果は、それぞれ千差万別で、ひとことでまとめることのできないものであった。今も、深く心に刻まれている者から、授業を受けた事さえ、忘れさってしまっている者。また、何となく覚えている者や、今も、時に読み返して人生の糧にしている者等々……。改めて、教育というものの難しさや、奥の深さを感じさせる結果であった。時の流れの中で、それぞれの人生を歩む中、小学校時代の課外授業の持つ意味は、まさに個人差のあるものだった。作品では印象に残った8人を紹介することにした。

そのうち、特に印象に残ったのは、脳性まひの影響で半身と言語に少し障害のある男性であった。授業を受ける前のクラスでは、いじめも受けたこともあったという彼は、授業を鮮明に覚えていた。また、司馬氏の文章でも特に「いたわり」や、「人の痛みを知る」「やさしさ」という言葉をあげている。驚いたのは、彼がついた職業が「介護福祉士」で、いわゆる「人の役に立つ」仕事をしていたことだった。まさに、教育効果のあった事例として取り上げた。また、もう一人、女性で介護福祉士をして老人ホームで活躍している女性も紹介した。彼女は、小学校の授業の感想文に「洪庵に会いたいなあ」と書いた児童だった。

また、反対の事例としては、クラスの人気者だった女子児童が、授業の記憶が全くなく、自分が忘れてしまっていることにショックを受けている様子も取り上げた。クラブ勤めをしている女性も、ほぼ忘れてしまっていたことに「私の心は晴れあがっていない」と当時の教材を読みながら、自戒するように語る場面もあった。これは司馬氏の「21世紀……」の文章の中にこういう文言があるからだ。

「君たちはつねに晴れ上がった空のように、たかだかとした心を持たねばならない」

さらに、工場勤めをしながら、「やさしさ」について、考え続けている男性や、声優を目指してフリーターをしている男性、絵本作家を目指して書店でバイトを続けている女性など、今を象徴する若者の姿も描いた。

制作者としては、良くも悪しくもこれが現実なのだろう、という意を強くした。ならば、それをそのまま視聴者に提示してみよう、と考えた。当然のことながら、この授業の効果はあったのか、なかったのか、結論は出るはずもない。教育とは時間のかかるもの。今は効果がなくてもまた、何年か後に不意に思い出すこともあるかも知れないし、逆のケースもあるだろう。そんなことを自由に考えることのできる作品になったと感じた。

作品のタイトルは、現役当時の女性教諭が司馬氏にためらいながらも、授業で子供たちが書いた、感想文を送ったところ、思いがけず司馬氏本人から、「御授業のご成果お見事で、私が授業をうけているようだ」などと書いた手紙が届き、教諭も児童も大喜びしたというエピソードから、とっている。

作品としては、① 司馬氏が何故児童向けの文章を書いたのか② 当初、その教科書が採用されなかったが、感動した或る女性教諭が課外授業を行った③ 授業を受けた子供たちは今何を思う？ と流れていく。最後は大きくなったかつての教え子たちと、老婦人となった女性教諭が授業をしたあの教室で再会することで終わる。

そして、エピローグは、「21世紀に生きる君たちへ」の子供たちの朗読が流れる中、司馬氏の文章が載った教科書がその後徐々に全国の学校で採用されるようになったことが今の情報として付け加えられる。朗読の最後は司馬氏のこの文章であった。

「私は、君たちの心の中の最も美しいものを見続けながら、以上のことを書いた。書き終わって、君たちの未来が、太陽のように輝いているように感じた。」

私はこのエピローグの前にプロデューサーとして、少し細工をした。それは、視聴者に大きな問いかけをすることにしたのである。

それは、司馬氏の言葉で、今回のテーマにふさわしいと考え、どうしても構成的に組み込みたいと、思っていた言葉であった。作家が講演で西郷隆盛を評するときに使った言葉である。「私たちは動物ですから、おなかがいいたら食欲が出て物を食べる。全部欲望の塊ですね。しかし、そこを頑張って「私」の塊を二%ほどでいいから、空気を圧縮する。バキュームというか真空をつくります。その二%というのは無私の部分ですね。そこに人が寄ってくる」¹⁾

リアリストの作家は、人間の98%は「私利私欲」であると見抜いている。しかし、残り、2%の無私をどう作るかに、賭けているともとれる。

プロデュース的には、この作品で扱っている事実を収斂する形で、この言葉を使うことにした。そして、ナビゲート役のナレーター役でもある女優が、こう問いかける。

「あなたに、その2%はあるでしょうか」

この問いかけこそが、今回行った授業の「主役」である。視聴者には、「2%はあるか」と問いかけたのだが、授業では、さらに突っ込んで、その内容を真剣に問うた。

「君の2%は何なのか、を書いてください」

4. 学生の回答と分析

この作品自体が、視聴者に「私たちにその2%はあるのか」と問いかけて、終わるところから、その2%の存在を確認させるものとなっている。そこで、学生には「あなたの2%は何か」と問うことで、その内容を問う課題を出してみた。そこに個々人のテーマが隠れているかもしれないと、推測したからである。その回答の内容は、半分子想が当たり、半分子想が外れた。個々人によって当然のことながら、2%のとらえ方も違うだろうし、これまでの家族の状況や個人資質の違いもあるだろうが、基本的には大きくばらけた多種多様な回答が寄せられた。全部を細かく紹介することは避けるが、ここではあえてカテゴライズした上で、彼らの2%を分析してみたいと思う。サンプルとなっている、回答は、淑徳大学と文教大学の「映像文化論」と「映像プリプロダクション演習Ⅱ構成」の授業に参加してくれた、学生計53人のものだ。

まずは、回答は大きく分けて、6つに分けられる。

- I類 「愛」など対象に対してのプラスの感情
- II類 具体的に「家族」を想定したもの
- III類 「利他」のように、一種論理として、「私利私欲」の反対を書いたもの
- IV類 「怒り」などプラスではなくマイナスの感情
- V類 「肉体」などフィジカルなこと
- VI類 その他

この6つについて考察をしていきたい。

まずはI類であるが、当初の予想ではもっと、多いのではないかと考えていたが、ずばり「愛」、あるいは「愛情」と書いたのはわずか4人。理由は「見返りを求めず、その人を思うものだから」「ロボットになくて人間にあるもの・人の痛みがわかること」また、「自分を愛すること、家族を他人を愛すること」などである。また、愛の中でも特定して「慈愛」「可愛がるような深い愛情」と記すものもいた。さらに、これも一種の「愛」の中に含まれると思うが「友情」と回答した者も一人いた。この「愛」を含め、前向きな感情を選んだ人が最も多く、「やさしさによる願い」「尽くす心」や、「誰かの幸せを

勝手に祈りたくなる衝動」というものまであった。

このジャンルで、一種具体的なものもあった。それは「救心」と書いたもの。彼女は東日本大震災を体験、被災者の心を救いたい、とこの言葉を選んだという。

結局、このカテゴリーで回答したものは11人で割合は21%で2割に上った。これは当初の予想通りでもあり、世に流布する映像作品のテーマとして、「愛」は一つの中心のコンセプトであることが、立証される結果でもあった。逆に言えば、そういう「愛」をテーマとした作品や番組を見てきたからこそ、「愛」を意識しているという側面もあるだろうが、「私利私欲でないもの」として、真っ先に浮かぶものとして、現代の若者も「愛」を挙げたという事実は、人間の普遍性を考えるうえでも、貴重なことであるように思える。また、この言葉にはキリストの「アガペー」(神の人間に対する愛のこと)から個々人の恋愛に至るまで、様々な広がりや、側面があるため、一言では言い表せないことから、これをテーマにした作品が数多く生み出されているといったところも、あると推測される。もう一点付け加えるとしたら制作者目線では、日常に埋没してしまうと、なかなかその存在を意識せず忘れがちな「大切なもの」としてのテーマとしても、「愛」は上げられるであろう。

Ⅱ類の「家族」については、誰しものが自分のルーツであり、初めてその中で育つのが大方の人の人生であろうから、大きく個人に根差していることが当然であるから、回答としてあることは予想できたが、「2%」に挙げている理由については二つの要素があるようだ。具体的に「家族」と書いたのは1人。「家族に対する思い」が1人。その理由として「無条件に愛を語れる」。これは少々Ⅰ類のカテゴリーとリンクすることではあるが、愛を語る対象としての「家族」を想定しているものと思われる。もう一つの要素は、DNA、つまり遺伝子である。「親からの遺伝子」と記した者、あるいは直接「DNA」とだけ書いた者もいた。これは、利害とかではなく、予め決められてどうしようもない物として、「遺伝子」を挙げているものと考えられる。家族も自分の意思では選べないことから、これも含めて「家族」というカテゴリーに属するとする。今は1人であろうと、家族のいない人は当然ながらいないわけで、人間の人格形成のまずは遺伝子と環境という二つに大きく関わっていることから、自分の意志とは関係なく選ばれる「家族」を挙げたのだろう。

結局、「遺伝子」を含む「家族」絡みの言葉を書いたのは4人であった。

Ⅰ類と同じようにⅡ類の「家族」も映像作品のテーマになっているものが多い。家族を「愛」や逆に憎悪など感情の対象とみるか、遺伝子的な科学から見て動かしがたい「運命」的なものとみるか、あるいはその両方の要素を持つのか、などこのテーマも古今東西、いろいろな表現で扱ってきたアイテムであることに間違いはない。

Ⅲ類は文字通り、私利私欲の反対を考えて、発想したもので、「スタッフとして誰かの役に立つこと」をあげたり、「自分の利益を考えないこと」、さらに文字の通りそのまま、「利他」として、説明を(誰かのための愛や温もり)とした回答もあった。このカテゴリーも、Ⅰ類の「愛」とかぶる部分があるかも知れないが、具体的に「少くから募金をするかと思う時や、席を譲ろうと思う気持ち」やもっと卑近な例で「弟に金をあげる」と書いた学生もいた。一概に即断はできないが、この項目に該当する者は、自身が単体で「表現者としては立つ」にはあまり向いてないのではという推測が成り立つような気がする。あまりにも思考が短絡的すぎる、と思えるからだ。このⅢ類だけは、テーマ設定としては薄く、あまりコンセプトとはならないと思える。このカテゴリーには5人の回答が該当する。

では、Ⅳ類はどうか。どちらかというとなマイナスの感情を選んだ人は、5人。しかし、内容は一つとして同じものはない。例を挙げると「恐怖」「不安と葛藤」「心の闇」「怒り」である。あと、一人は直接「マイナス」とだけ書いて「ロボットはマイナスになることはない」と説明している。これらはすべ

て前向きな感情の裏返しであり、対であるとも考えられるが、あえて「マイナスの感情」としてカテゴライズした。テーマとしては特にドラマなどはそのままこういう感情をテーマに制作している場合が多く、この項目に当てはまる人は、ドラマ制作者に向いているように思える。

V類は、予想外の項目の一つである。「私利私欲ではない」「無私」なものとしてフィジカルなものあげるのは、どういう心理であろう。これは推測にしか過ぎないが、この二つが一つの「概念」であるからこそ、そうではないもの、「概念」ではないものとしてフィジカルに直結したものを選んだ可能性が高い。直接、「肉体」と記している者、具体的に「犬の散歩」とした者。また、「徒歩」とした者もいた。中には直接のフィジカルではないが「努力する姿」として前向きに生きる存在としての人間を取り上げる者もいた。このカテゴリーは以上4つが入った。

テーマという観点で見た場合、このV類は一つの塊をなしているといえる。当然のことながら、フィジカルなしでは映像は成り立たないわけで、そこにテーマを置くことは、感情の表出する媒体としても、重要な分野であると言えるのではないか。

最後のVI類は、この五つにカテゴライズできなかったものではあるが、このバリエーションが多かったことが、最も意外ではあった。個性を感じさせるものが多い。

「教養」、「理想」といった高みを志向するものや「過去」、「今」といった時制にこだわった回答もあれば、「相手の心を読み取る力」と具体的な人間の能力を問うもの。また、ざっくりと「感情」とだけ表した回答もあった。それに付随して「想い」というものもあり、「意地」として(生きる意思)と記しているもの。あとは「誇り」や「生死」。自らを評したの であろうか「地味」という文言もあった。制作者を目指す学生にふさわしく、「創作意欲」と記した者もいた。

しかし、このどの項目にも当てはまらない回答の中で、最も考えさせられたのは次の文言であった。

「他人の98%に支配されないように気を付けながらも、他人の98%に協力しようとする2%です」
ここには、強烈な意思が込められている、と感じる。あえて、解釈するなら、他人の私利私欲にはできるだけ影響を受けないように警戒しながらも自己を確かに持ち、他人のそれに協力することこそが自分自身のアイデンティティーであると宣言しているかのようである。ここにはこの社会で生きていく上での、一つの目指すべき「理想像」さえ感じるのは私だけだろうか。「共生」と「自己確立」という二つを併存させようとする強い意識が感じられるのである。この中には、西田幾多郎哲学で言うところの、相反する二つの対立物とその対立をそのまま残した形で同一化すること、という「絶対矛盾的自己同一」といった風情も感じられる。

この問いを学生に投げかけてよかった、とさえ思った。

この回答をテーマにして映像作品を作れば、かなりハードルは高いが質の良いメッセージ性の強い作品ができるのではないか。そんな制作者の創作意欲を掻き立てるような、「テーマ設定」になりうると、考えられる。

8

〔まとめ〕

映像表現を志望する学生の中で、何かを表現したいのだが、それがまだ見つからない学生が少なからずいる。そんな時、ある程度自身のテーマを認識させようと、話し合うことがままある。それでも、自分のテーマを見つけさせることは、なかなか難しいと実感していた。そんなさ中、別の意図でこの作品を使って授業をした時に、学生の回答を見ていてテーマ設定をする際に、この方法は有効であることに気づいたのである。

そもそも、この「司馬遼太郎からの手紙」は、件の授業を受けた小学生たちが、今何をして何を思っているのか、「教育の効果はあったのか」を追跡取材した結果、それを正直に提示して、世に問おうとした作品である。教育に即効性のあるものはなく、制作者としては「教育とは時間がかかるものだ」との実感を強くした結果であったが、視聴者にはそれぞれに感じるところがあるだろうとして、放送に至ったものである。それに付随する形で、視聴者に「私利私欲以外にあなたには何があるか」を問う作品となっている。

この作品を授業に使って、学生に「教育とは何なのか」を考えてほしかったことが、まず一義的であり、二義的なこととしてあえて、「あなたの2%」の内容を学生に問うたのである。すると、そこに書かれた回答がそのまま、表現のテーマとなり得ることに気づいて、この考察を進めてきた。こうして分析してみて、さらにその思いを強くしている。

回答を見てみると、この問いかけは、本人の価値観や人間観などがある程度正直に出るものであることが、よくわかった。映像作品自体が、制作者の価値観、人間観などがベースにあり、それが作品を通して表出するものである以上、当然と言えば当然ではあるのだが、逆に回答自体がそのまま本人が映像作品を作る際の根底のテーマになり得ることは、小さな発見ではあった。したがって、この回答を基に学生と話し合っていくことで、自身の表現のテーマがはっきりと見えてくるのが大きく期待できると、考えられる。それはまた、これからの実践になってくると実感している。これを教育現場で活かしていきたい。

最後に、映像表現全般についても、この考察を進めていく中で、一つの仮説が浮かんだので、紹介しておきたい。なぜ、表現するかの根本的な問いの部分である。

「人はなぜ表現するのか」を考えた場合、様々な回答が予想されるであろう。ジャンルを芸術まで広げると、芸術作品はほとんどがこの「2%」に該当するだろうし、映像や、活字の作品と呼べるものは、何を伝えたいかにもよるだろうが、「正確な情報を伝えたいから」という場合もあるだろうし、「人間の喜びや悲しみを伝えたい」という者もいるだろう。また、「世界はこんなに多様性がある」ことを立証するために、表現している製作者も散見できる。しかしながら、その奥底のモチベーションを、あえて言葉にするならば、この考察で取り上げた「2%」を表現するために、制作している気がするのである。私自身も思い当たるところがある。

たとえ、「98%の私利私欲」を描いたとしても、実は残りの「2%」を描くためにこそ、それを描いていることはよくあることで、表現の奥底にはいつも、この「2%」が横たわっているのではないか。それを考える課題をまたもらった。今回は有効性についての考察だが、今後さらに、別角度から考察を深めていきたい。

注1) 宮崎駿監督は、2013年9月6日記者会見を開き、作品「風立ちぬ」を最後に引退を発表したが、2017年5月19日に引退撤回を発表、さらなる長編新作に挑んでいる。

注2) 1954年に誕生した東宝の「ゴジラ」シリーズの第29作目。アニメ映画「エヴァンゲリオン」シリーズの生みの親である庵野秀明監督が脚本、総監督を務め「現代日本にゴジラが現れたら、日本人はどう対処するのか?」を主題にリアリティーを追求、2016年、アニメ映画「君の名は。」と共に、ブームを巻き起こした。

1) 『司馬遼太郎全講演(5)』朝日文庫 p.203